

とみている点に見ようとする。そして両者のこの関係を明確にする理論が、アリストテレスとは異った意味でのスアレスの作用因の理論（両者の相違を明確にするため著者は *causa efficiens* を特に作用因と訳す）であると考えている（255頁以降）。

この見解はスアレス理解として斬新であるばかりでなく、*affirmative* に主張されるかぎり、正しいと言わねばならない。たゞ著者が十分に顕現化していない（もう）ひとつの鍵がスアレスの形而上学には含まれていると思われる。それはスアレスにおいて有限存在（者）は無限存在（者）に絶対的に帰属しているものとしてのみならず、極めて積極的な意味で *potentia oboedientialis* として扱われているという点である。（神も含めた）「自然」が自然的秩序の中でいわば内的に完結していながら（これがスアレスが独立した「形而上学」を構築し得た所似であろう）、しかも神の側からも被造物においても「超自然」に向って開いているという構造を自然の形而上学的分析から明らかにしようとしているのが彼の「形而上学」ではなかろうか。そしてこゝに中世と近代の接点といわれるスアレスの思想的意義もあるのではなかろうか。

種々の意味で非常な労作である本書がスアレス研究、更にはトミズム復興以降のスペイン思想の研究の良き契機となることを希望したい。

山田晶著：アウグスティヌスの根本問題

——中世哲学研究 第一——

1977. 創文社 pp. xix+387

加 藤 信 朗

今回、山田晶教授の三十年に亙るアウグスティヌス研究の成果が一書に纏められ、上梓されたのは喜ばしい。これはこの三十年間の教授のアウグスティヌス研究の歩みのなかで、その折その折、教授に立ち現われた問題への教授のひたむきな取り組みの記録である（内、多数の論文は今回大幅に手が加えられ、新たな論文となっている

る)。それゆえ、これはこの期間のわが国のアウグスティヌス研究の歩みの重要な一端の記録でもある。著者よりもやや遅れて同じ途を辿った著者にとっては、これらの論文はその折その折々の新鮮な感動であり、導きの星だった。本書には収録されなかったが、教授の処女作『聖アウグスティヌスに於ける回心の問題』が『哲学研究』誌上に連載され始めた頃、それが当時、学生であった筆者に与えた新鮮な感激を忘れることはできない。

本書は五つのグループに分たれる十三篇の論文から成っている。第一のグループを成す四篇の論文は、著者によれば、アウグスティヌスにおける《テオロギア》の性格、つまり神について語るということが何であったのかという問題にかかわるものなのだが、それは『告白録』における「告白」とは何であったの問題に関わる論究を主とし、全篇中、殊玉、白眉の諸論文を収めていると筆者には思われる。それは著者のローマ留学後、行なわれた長期にわたる克明な『告白録』の演習を通じて、いわば、研究室の中から生れて来た作品という感があり、著者がアウグスティヌスをどのような仕方で読んでいるか、長年の習練の末、著者の内に形成されてきたアウグスティヌス読解の習性が原典の精緻な分析の背後におのずと輝き出、およそアウグスティヌスの著作がいかにも読まざるべきかを人々に告げている。なかでも、筆者の讃嘆、愛好するものは第三論文『冗舌の啞』の一篇である。それは『告白録』I, IX, 4 における *loquaces muti* という二語の解釈のための論文であるが、そこでは実に、八篇の英訳、七篇の仏訳、六篇の独訳、一篇のイタリア語訳、七篇の邦語訳、一篇のスペイン語訳、計三十篇の各国語訳と八篇の校訂本が参照され、この二語の解釈が文法論的、修辞論的、文脈論的……といった多方面の角度から、そのあらゆる可能性に関して検討され、著者を納得せしめる唯一の解釈が追求されている。参照文献の数量の多さ、その分類というような統計論的な手続きが論文の価値を高めると言うつもりは筆者には毛頭ない。そのような調査は、問題を適確に把握する直観と把握された問題を精確に分析追求する論理なしには、まったく、盲目であり、それこそ冗舌の啞に墮さざるを得ないだろう。この点、本論文においては、著者の直観と論理は問題を適確に把握し分析し、多量の文献のうちに内蔵される問題を正確に剔り出している。しかし、筆者の讃嘆するのはただそのような筆者の腕の冴えではない。むしろ、『告白録』の原文がこれほどの吟味に堪えうること、また幾十人

の専門家の手にかかってもなお汲み盡しえないどれほど豊かな「言葉の力 (*λόγου δύναμις*)」がそこに内蔵されているかが本論を読み進むうちに、おのずと、読者に迫ってくるからに他ならない。それこそ真に「読解のこころ」なのではなからうか。『告白録』を読む時、信頼しうる注解書の存在しないことをわれわれは嘆きたくなることがあるが、いまだ、われわれはそれを望むべくもないことを本論文は教えてくれる。その中には、著者がここに取出した二語のような語や句がまだ無数に含まれているからである。本論文は今回大幅に書き改められたものの一つである。しかし、新たに提出された解釈 (pp. 77-86) はなお筆者を十分に説得するものとはならなかった。……*quoniam loquaces muti sunt*, における *sunt* の直接法現在形は現に神について黙しているもの (*tacentibus de te*) の事実に言及していると考えるのが自然であり、また、この文脈においていっそう充実した力をもつと考えられるのではなからうか。それゆえ、初出の本論文 (1922, 『中世思想研究』V pp. 56-77) における著者のように、*tacentibus* はマニ教徒に言及すると考えないにせよ、ともかく、誰であれ、多弁を弄しながら、神について何も語らないものの意と解するのである (*tacere* は「あえて口を鎖す」というよりは、単純に「語らないこと (*non loqui*)」の意味と解する。したがって、*loquaces muti* は多弁しながら、その多弁が真実の「ことば (*verbum*)」とならぬもののことを言う)。この場合、*tacentibus* は「もしも、黙しているとすれば」という言外の条件を *quoniam* の文中に引入れると考える必要はない。これはアウグスティヌスが現に念頭においている人々の事実存在に言及するからである。したがって、*sunt* の位置に接続法 *essent* を期待する必要はないのではなからうか。むしろ、提出された新解釈の如く、*quoniam* 以下を *tacentes* が *tacere* していることの主観的な理由と解する時にこそ、もしかして、接続法が期待されるのではなからうか cf. Kühner-Stegmann, II, II, §182, Anm. 3, ただし, § 239, 2の例もある)。要するに、*Et vae tacentibus de te...* の一文には、著者の言われる「否定の否定」(P. 88) という、いわば、ハムレット的的内省的思考型は含まれず、むしろ、内から溢れる神への讚美の言葉をそのまま素直に歌いあげずにはいられない古代人のおおらかさがアウグスティヌスの内にはあったと筆者には思われるのであるが、どうであろうか。

第二グループから第四グループまでの八篇の論文はそれぞれ真理と認識の問題、

悪と行為の問題、存在の問題にかかわる。これらは上述した著者のアウグスティヌス解読の方法にもとづいて、著者に迫って来た問題への著者の対決の記録である。そこにひとは著者の人格とアウグスティヌスの著作が触れ合い、火花を散らすのを見る。そして、著者の思索と人格の全体を通じてアウグスティヌスの問題性が浮き上がってくるのを見る。それが、著者の言う、アウグスティヌスの思索の「主体化」(xiii)ということであろう。

この対決と主体化の過程が帰趨して行ったところはアウグスティヌスの内に「存在の哲学」の端初、乃至は、萌芽を見出すということだったように思われる。ここで、存在とはわれわれ自身の存在を含む存在、したがって、著者の語法では、「主体性の濃いもの」(xxi)として把握される存在、そして、終極には「被造」としてはじめて把握されうる存在のことである。

これは重要、かつ、貴重な帰結である。著者が研究を始めた当時の学界の状況を顧る時、この帰結に至るには容易ならざる路程があったと考えられ、また、その労苦は各論文の行間に滲み出ている。だが、それと共に、われわれはいまや著者の業績によって拓かれたアウグスティヌス研究の端初に立たされているという感が筆者には強い。この問題は、著者にとっては、トマスとの関連で論じられた神と世界の関係の問題（第四グループ）としてもっとも正面から論じられ、したがって、引きつづき企画されている本巻の続巻に現実的に思索が展開されると期待されるが、ここでは、残された紙数を埋めるために、筆者にも関心の大きい第二グループの諸論文で取上げられた「真理」の問題にかぎり、そこに露わに浮び上らされてくる問題点を指摘して置くに止めたい。

著者が第五論文『真と真のもの』によって *veritas*（「真」と訳される）と *verum*（「真のもの」と訳される）を明別し、基底に潜む問題を剔出した業績は大きい。なぜなら、欧米の文献でもこれらを等しく *truth*, *vérité* と訳すことが多く、そこから問題の混乱、アウグスティヌスの思索のかかわることの取り違えが起って来ていると考えられるからである。だが、翻って、アウグスティヌスの思索がこの二語の分別によって関わっていたものが何であったのかを改めて問い直す時、今日の哲学の状況にいくらかでも身を置くものにとってこれに答えることがけっして容易でないことは直ぐに見て取れるであろう。二語が異なる二語であると言っても何にもな

らない。二語の区別によって何が明らかになるのかが明示されなければならない。安易に「神」に助けを求めるべきでもない。「神」の何であるかはアウグスティヌスにとって、むしろ、*veritas* の何であるかの追求を通じて示されて来ていると思えるからである。この点についての著者の見解は本書ではまだ十分に展開されていない。だが、アウグスティヌスの思索がまさにこの一点にかかっていたのは確かであり、「存在」の問題、終局には「被造」として開示される自己と世界の存在の確かさ (*certitudo*) の問題が手がかりである。自己、および、自己と共に与えられる世界事物の存在の確かさとは何か。それは総じて事実存在の確かさの問題である。アウグスティヌスの思索が自己の軌道の上にゆきついた時、回り始めたのはまずこの問題の周りだったと思われる。*Contra Academicos* から *Soliloquia* に至るまでの過程で、数学上の確かさ(算術の規則)、論理上の確かさ(排中律や条件的な確かさ)と並んで、自己と世界の事実存在の確かさが同じように真なること (*verum*) の保証として立ち現われてくる。他方に、筆者の調べたかぎりでは、*Contra Academicos* では *certum* とは *verum* であり、*verum* と *veritas* はしばしば意味の区別なしに用いられている。しかし、*Confessiones* では、*certitudo* と *veritas* という二つの事柄が愛知の途上においてわれわれに対してもつ位相の相違はすでに明確に区別されるに至るのではなからうか (*veritas* は *verbum* の生れるところ、*certitudo* は *veritas* 探究の端初の置かれるところではなからうか)。この意味において、*Contra Academicos*、*Soliloquia*、*De Magistro*、*De Libero Arbitrio* 等の初期著作における *certitudo* と *veritas* の関わりの解明、また、*Confessiones* におけるその解明、および、初期著作と *Confessiones* の比較研究が当面追求されるべき緊急の課題であると筆者には考えられる。著者の業績を通じてわれわれに迫ってくるのはこのような問題状況であり、著者が「主体化」と言われる事柄の内容も、また、それによって獲得される「存在」という事柄の内容もこのような (*certitudo* と *veritas* というような) 事柄自体のもつ構造の解明を通じて明らかにされてくると筆者には信じられる。

さらに、アウグスティヌスの思索を導くテロスに存在の問題のあることを著者に開示したのがトマスであったことは著者の語り明かしてくれる所である。しかし、逆に、トマスの思索のかかわるものの何であるかの真相がアウグスティヌスの思索

のかかわるものの何であるかの究明を通じて開示されてくる筈だということも著者はすでに熟知しておられるのではなからうか。自然と超自然の秩序を始めから分断し、階層化することが、今日、哲学にせよ、神学にせよ、思索の生命を枯渇させることになるのは目に見えている。合理と神秘が接続する上昇の道にアウグスティヌスの存在の思索が定位している所にその魅力はある。このアウグスティヌスの思索に息吹かれて、トマスの思索をどのように生きたものとして著者が呈示してくれるのか、著者の力作の続刊が待たれる。

トマス七百周年を記念する諸論文集

フランシスコ・ペレス

周知のように、トマス没後七百周年を記念して世界中多くの催しがあったわけであるが、この関係でまた多くの出版物が刊行されてきた。それらによって種々の問題に新しい光が当てられ、その理解が深められてきたことは、七百周年の喜ばしい一つの結果であるが、それよりももっと広い収穫は、これらの刊行物が可能にしてくれた全体的な展望そのものであろう。それは、ちょうど聖職者の教育におけるトマスの従来位置が大いに疑問視されている時代であるからこそ、興味のあるものなのである。そして最近刊行されてきた諸論文集は、トマス研究の熱意がなくなっていないことを明らかに示している。一人の研究家だけの著書もあり、また学術雑誌に散見する多くの論文もあるが、ここでは論文集という類のものに限って述べることにしたい。それは二種類のものであって、一つは学術雑誌の特集号であり、もう一つは独立した記念論文集として企画されたものである。

後者の一例は、我国で刊行された『トマス・アクィナス研究——没後七百年記念論文集——』（松本正夫・門脇佳吉・K・リーゼンフーバー編、創文社、昭和50年、519ページ）であるが、それは海外のものとは比べても恥しくない我国のトマス研究の成果である。それについての詳細な紹介は要らないであろうが、もっとも一般的な点についてだけ簡単にふれておきたい。我国では今までトマスが主に哲学者とし